

朝さろんの本棚 〈46〉

M・シェリー『フランケンシュタイン』について

46th morning:2015年4月9日(木)@渋谷

参加者:7名

『フランケンシュタイン』とは、自身と他者のあいだに存在する義務と責任の問題を、〈創造主と被造物〉〈親と子〉という関係性と重ね合わせながら、孤独な煩悶のうちに描いた作品。

【テーマ】

〈孤独のなかの「問い」(1)〉

⇒ 善とは何か？悪とは何か？という「問い」に立ち返ってみること、孤独とは何かについて普段とはまた別の角度から考えてみることに、「問いと向き合う」という孤独な時間のなかにゆったりと立ち尽くしてみることに、それを意識したシーズンです。小説に丁寧に向き合うことを第一にゆつくりと、でもなるべく楽しみながらいっしょに考えてみようというシーズンです。

もう一つ、シーズンを通じて、「小説とは何なのか」ということについても、いっしょに考えることができたらいいなと考えています。

【本】

“*Frankenstein, or The Modern Prometheus*” Mary Shelley (1818, UK)

『フランケンシュタイン ——あるいは現代のプロメテウス』メアリー・シェリー

文庫本: 光文社古典新訳文庫(小林章夫訳、2010)

【メアリー・シェリー (Mary Shelley)】

1797年8月30日 - 1851年2月1日。イギリスの小説家。ゴシック小説『フランケンシュタイン』で名を残したが、SFの先駆者と呼ばれたり、あるいは創始者と見なす者も少なくない。フェミニズムの創始者、あるいは先駆者とも呼ばれるメアリー・ウルストンクラフトを母、無神論者でアナキズムの先駆者であるウィリアム・ゴドウィンを父として生まれた。詩人のパーシー・シェリーは夫。日本では単にシェリー夫人と呼ばれることもあった。1817年5月『フランケンシュタイン』脱稿。1818年1月1日『フランケンシュタイン』初版をロンドンの小出版社 Harding, Mavor & Jones から匿名で出版。同年3月11日初版に夫シェリーの序文を付けて再度匿名で出版。1831年『フランケンシュタイン』第3版(改訂版)を出版。1851年2月1日メアリー死去。

【ストーリー】

小説は、北極探検隊の隊長ロバート・ウォルトンが姉に向けて書いた手紙という形式になっている。ウォルトンは北極点に向かう途中、北極海で、衰弱した男性を見つけ、彼を助ける。彼こそがヴィクター・フランケンシュタインであり、彼はウォルトンに自らの体験を語り始める。ある時を境にフランケンシュタインは、生命の謎を解き明かし自在に操ろうという野心にとりつかれる。そして、狂気すらはらんだ研究の末、「理想の人間」の設計図を完成させ、それが神に背く行為であると自覚しながらも計画を実行に移す。自ら墓を暴き人間の死体を手に入れ、それをつなぎ合わせることで11月のわびしい夜に怪物の創造に成功した。

しかし誕生した怪物は、優れた体力と人間の心、そして知性を持ち合わせていたが、筆舌に尽くしがたいほど容貌が醜いものとなった。そのあまりのおぞましさでフランケンシュタインは絶望し、怪物を残したまま故郷のスイスへと逃亡する。しかし、怪物は強靱な肉体のために生き延び、野山を越え、途中、「神のわざ」(Godlike science) である言語も習得して雄弁になる。遠く離れたフランケンシュタインの元へ辿り着いたが、自分の醜さゆえ人間達からは忌み嫌われ迫害され、孤独のなか自己の存在に悩む怪物は、フランケンシュタインに対して自分の伴侶となり得る異性の怪物を一人造るように要求する。怪物はこの願いを叶えてくれれば二度と人前に現れないと約束するが、さらなる怪物の増加を恐れたフランケンシュタインはこれを拒否する。創造主たる人間に絶望した怪物は、復讐のためフランケンシュタインの友人・妻を次々と殺害する。憎悪にかられるフランケンシュタインは怪物を追跡し、北極海まで来たが行く手を阻まれ、そこでウォルトンの船に拾われたのだった。

全てを語り終えたフランケンシュタインは、怪物を殺すようにウォルトンに頼み、船上で息を引き取る。また、ウォルトンは船員達の安全を考慮して、北極点到達を諦め、帰路につく。そして、創造主から名も与えられなかった怪物は、創造主の遺体の前に現れ、彼の死を嘆く。そこに現れたウォルトンに自分の心情を語った後、北極点で自らを焼いて死ぬために北極海へと消えた。怪物のその後は誰も知らない。

【お題】作品を読んで次の問いについて考えてみましょう

(1) 作品を通読した感想をみんなでシェアしてみます。

面白く感じたシーンや、よく意味がわからなかった箇所、もっとよく考えてみたいところなど、自由に披露してください。

(2) 本書の前半部(第12章まで;p1~p209)を中心に、疑問や心に残った「問い」を挙げてみます。

また、これらの「問い」をさらに探究するための手掛かりとなる章やポイントがあるかどうかを一緒に考えてみます

(3) 初回なのでもっとも基本的な点を確認したいと思います。

この”怪物”には名前がありません。名前がないということはどういうことを意味するのか、どういう状態に置かれているということなのか、そこをみなさんと話し合っ確認したいと思います。

【解題】 『フランケンシュタイン——あるいは現代のプロメテウス』について

●本作の小説としての特色

◇小説 ～見るもの／読まれるもの～

怪物は醜いゆえに、小説のなかでもつねに「見られる存在」である。作中で、怪物の立場に立っていささかなりとも怪物を理解しようとした人物は、ただひとり盲目の老人だった。彼は、怪物から打ち明け話をされたとき、「私は目が見えず、あなたの顔はわからないが、あなたの言葉には何か誠実だと思わせるものがある」と言う。怪物の内面を見ることのできたただひとりの人間が、視覚を奪われた者であったということは、注目に値する。つまり、この小説を視覚化することは、怪物を一方向的に「見られる存在」に規定してしまうことにほかならず、怪物の側から「見る」可能性を遮断してしまう。ところが小説では、怪物自身の視点から眺められた「怪物の語り」が、数章にわたって挿入されている。したがって『フランケンシュタイン』は、「語り」という小説形式特有の構造に立脚した作品であると言える。

(『フランケンシュタイン』解剖講義)p. v～vi

◇異化

怪物はついに本が読めるようになり、たまたま戸外に置き去りにされていた本を持ち帰って、読書を始め。それらを読みながら、人間の世界に関する知識を獲得した怪物が到達したのは、「自分とは何か」という疑問であった。とりわけミルトンの『失樂園』を読んで、最初人間として神から造られたアダムや、神から疎まれ捨てられたサタンと自分とを比較しながら、怪物は自分の存在自体を前景化し、定義づけてゆくのである

(『フランケンシュタイン』解剖講義)p.94-95

→人間から造りだされて、しかも求められず、かつ同類はいない、圧倒的な孤独のなかで自身の存在の根源を問うこと(問うてしまうこと)、という業(=悲劇)

◇間テキスト性 ～『失樂園』と『フランケンシュタイン』～

メアリーは『フランケンシュタイン』の執筆に先立ち、一八一五年から翌年にかけて、ミルトンの『失樂園』と『復樂園』を二度にわたって読んでいる。彼女が『フランケンシュタイン』の創作にあたってミルトンを強く意識していたことは、次のような『失樂園』からの引用が、題辞として掲げられていることから明らかである。

創造主よ、私は、土くれから人間の形にしてくださいと、あなたに頼みましたか？ 暗闇から私を導き出してくださいと、懇願したでしょうか？ (第一〇四巻七四三～五)

これは、樂園から追放されたアダムの嘆きの言葉の一部である。『フランケンシュタイン』では、アダムの状況に置かれているのは、怪物である。つまりこれは、創造者であるフランケンシュタインに対す

る怪物の訴えの言葉として響くのである。するとフランケンシュタインは、神の役割を担っているということになる。それは、怪物がフランケンシュタインに対して述べている次の言葉によっても裏付けられる。

「おれは、おまえが造ったものだということを、忘れるな。おれは、おまえのアダムであるべきなのだ。だがむしろ、おれは何も悪いことをしていないのに、お前に追い立てられて喜びを奪われた墮天使みたいなだ」(第一〇章)

怪物の言うとおり、怪物の立場はアダムとサタンの両方を兼ね備えている。この小説では、『失樂園』が複雑に変形して重ね合わされているのである。フランケンシュタインは、怪物に対して神のように振る舞うが、その振る舞い方は、『失樂園』の神とはまったく異なる。ミルトンの描いた神は、アダムに女の伴侶を造り与え、アダムとイヴに知識の木の実を食った罪を贖わせるため、大天使ミカエルを遣わし、たとえ楽園を去っても自らの内なる楽園を得ることになるだろうと告げさせる。他方、フランケンシュタインは、怪物に請われて女の伴侶を造りかけたものの、途中でそれを破壊してしまうばかりか、怪物にいかなる救いも与えようとしない。フランケンシュタインは、生き物を造ったあとは、ただそれを忌み嫌い拒絶するばかりで、それに対して何の責任も共感も感じないのである。彼は怪物に対して、「おまえと私の間には、つながりはありえない。我々は敵同士なのだ」(第一〇章)と言ってはばからないのだ。しかし、フランケンシュタインと怪物は、ともに神から見放された状態に陥っている点で、共通点がある。怪物は「おれはサタンのように、自分の内に地獄を持つ」(第一六章)と言い、フランケンシュタインは「私は悪魔に呪われ、永遠の地獄を背負っている」(第二四章)と述べる。つまり、フランケンシュタインは、創造者であると同時に、地獄落ちする者でもあるわけだ。このように『フランケンシュタイン』は、神とサタン、アダムの関係を複雑に変形しつつ、『失樂園』の物語を随所で反響させている。

(『『フランケンシュタイン』解剖講義』)p.98-100

- 自身が成そうとした技とその影響について、予めどう認識すべきであったのか？
- 自身の被造物に対する倫理的/科学技術的な責任をどう果たすべきであったのか？
- 事後の彼の態度のなかで、反省や責任を果たすような態度がどう読み取れるか(否か)？

●シーズン1回目(第46回)での検討の記録

【感想】

●怪物と博士の関係が何を象徴しているのか？

(資本家と労働者、神と人間、親と子、殺人者や引きこもりとその親、ロボットや原子力技術とその発明者、そして、心の中に生み出された怪物と「わたし」自身というようなたくさん関係性を想像させられた。)

●《エヴァンゲリオン》の碇シンジ／サトルの関係、《デビルマン》の二面性／ボードレール》の関係、《ウ

ルトラセブンにおける正義と差別／カント》の関係、というような図式が参照できるのでは？

- 最初は怪物の名前が「フランケンシュタイン」だと思った。この誤ったイメージはどこから来たのか？（最初にこの誤解のきっかけを作った(派生)作品はなにか？そして、何でそこでは怪物の名前を「フランケンシュタイン」としたのか？）
- 実は「フランケンシュタイン」をよくわかっていなかったが「より知らなかった」と思った。メインとなる物語の枠の外の語り手の存在がどんな役割を果たしているのか不思議だった。
- 作中での行動範囲が実に広い。トルコや南米など世界中を視野に入れている。「国家」や「国境」という境界意識が今ほど自明的に強化されていないから？
- 怪物に最初から大人の脳が搭載されて生み出されたので、怪物の発達段階や成長を語る様子が面白かった。
- 怪物やヴィクターが語っているのだが、どこか作者(メアリー・シェリー)が読者に向けて語りきかせているという印象を覚えた。語りが饒舌で回りくどさや冗長さを感じるところもあった。
- 副題にある「あるいは、現代のプロメテウス」って何だろうか？科学技術とどんな関係が一あるか？
- 文庫の表紙イラストがもう1人を後ろから抱きかかえている感じでなんの象徴だろう？
- 科学者が研究に没頭して狂気じみていく様子が印象的だった。まだ誰も見つけていないものを自分が見つけてやろうという熱量はどこからやってくるのか。
- 作った後落ち込むのはなぜか？「作った義務を果たせ」とは何だろうか？

【気になったポイント／もっと考えてみたい点】

- 怪物が自分のみにくさに気付いたのは言語を獲得したから？
- 女性の登場人物がみんなとってもいい人(善人)に見えるけど？
- 産み出すことの義務と責任
- 人はいったい何を創り出したいの(産み出したい)のか？
- 「命は苦しみの積み重ねでしかないが、それでもおれには愛しいものだ。だからおれは守るのだ」(p184)
- 生命の原理はいったいどこから生まれたのか？(p94)
- 産むことと育てることのあいだにある関係性やその差について。
- ヴィクターは罪悪感を全然感じていないの？(感じるとしたらどこか？作ったことか？棄てたことか？それとも？)
- 自己の正当化／物語には三人の語り手が出てきていることで歪められた側面があるのでは？
- ジュスティーンの公判中にヴィクターは白状すれば良かったのに！(p157)
- 人造人間を嫌っているヴィクターがなぜ彼の話聞く(要求を受け入れる)気になったのか？「幸福にしてやるべきではないかと思ったのです」(p188)
- 喜びを奪われた墮天使(という表現)(p184)

【作品関連情報(会の中や事後に話題に出たものなど)】

●映画『ゴシック』

『ゴシック』(Gothic)は、1986年のイギリス映画。『フランケンシュタイン』、『吸血鬼』を生み出したディオダディ荘の怪奇談義を舞台に繰り広げられるホラー作品。

●小説『佐川君からの手紙』(唐十郎の1983年の芥川賞受賞作)

佐川一政(さがわ いっせい、1949年4月26日 -)は、日本の殺人犯、小説家。パリ人肉事件の犯人として知られる。この人肉事件の映画化の話が持ち上がる。佐川は劇作家の唐十郎に依頼するも、唐は佐川が望んでいなかった小説版「佐川君からの手紙」(『文藝』1982年11月号)で第88回芥川賞を受賞する。作家唐十郎との手紙のやり取りを出版化した作品。

【まとめ】

200年前の作品であるにも関わらず、時代を越えて胸に迫るような普遍的な「問い」をたくさん感じる作品であると思います。またそれらの「問い」が、作中に現れる3人の語り手——怪物、ヴィクター、ウォルトン——のそれぞれ少しずつ状況の異なる「孤独」のなかで繰り返し問い直されることとなります。読者ひとりひとりもまた、そのような孤独を抱える登場人物に寄り添いながら、彼らの「問い」を自分自身の「問い」として引き受けながら、本書を読まれたのではないのでしょうか？

なかでも印象的なものとして、「自分とは何なのか？」と怪物が自問自答する箇所があります。創造主であるヴィクター〔人間〕の被造物である怪物の存在によって、人間が人間によく似た理性を持つ生命体を新たに生み出すことにより、人間自身の境界がゆらぐような体験をすることになります。しかしそれでもなおヴィクターは、そのような事実を正面から受け止めて責任を果たすのではなく、自分ひとりの苦悩の殻のなかに留まっているようにも見えます。だとすると、このような人間が描かれる本作とは、いったいどういう作品だという風に考えられるのでしょうか？そして、人間をこのような深遠な探求の淵に立たせる「怪物」とは、いったい何でしょうか？

この後の「問い」はぜひみなさん自身で、考えてみてください——。

“Frankenstein, or The Modern Prometheus”

朝さろん 46th morning
〈孤独のなかの「問い」(1)〉



※参考文献

- ・『メアリ・シェリー『フランケンシュタイン』 2015年2月(100分 de 名著)』
廣野由美子 (NHK 出版、2015)
- ・『批評理論入門—『フランケンシュタイン』解剖講義』 廣野由美子(中公新書、2005)
- ・『現代批評理論のすべて』 大橋洋一(新書館、2006)
- ・『小説の技巧』 デイヴィッド・ロッジ (白水社)